弥生人は龍を見たか？

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

弥生時代中期後半（紀元前１世紀頃）の唐古・鍵遺跡と清水風遺跡では、人物や鹿、建物など、具象的な図像を表した「絵画土器」が発達した。それらの図像は、ほとんどの場合、現在の我々が見ても何を表したかがわかり、弥生人の生活世界を想像することができる。これに対して、弥生時代の後期になると、唐古・鍵遺跡をはじめ、奈良盆地の諸遺跡では、「絵画」に代わり、壺などの土器の器面に、直線（縦線・横線・斜線・V 字形・三叉文）、曲線（U 字形・ノ字形・J 字形・円形）、点などで構成される抽象的な記号が表されるようになった。「もし、日本に文字が伝わらなかったら、弥生時代の記号が文字として成立したかもしれない」と考えたのは、考古学者の森浩一氏だった。唐古・鍵遺跡を調査する藤田三郎氏も、現代の地図記号や絵文字と同じように、それらの記号が何らかのメッセージを伝達する媒体として機能したと見る。しかし、その意味するところは残念ながら解読不能と言わざるを得ない。

ところが弥生時代後期の土器には、そうした記号に混ざって、特定のモチーフを具象的に表した「絵画」が限定的に存在する。天理参考館が所蔵する人物図像を表した土器片（唐古・鍵遺跡）がその貴重な一例だが、このほか、西日本の各地で、「龍」とされる図像を表した土器が点々と発見されているのだ。1966 年、森浩一氏が、大阪府船橋遺跡で採集された長頸壺の「奇怪な動物の線刻画」について龍をモチーフにしたと認定し、さらに 1970 年、大阪府池上曽根遺跡で井戸から出土した新資料を、佐原真・金関恕両氏が「龍」と追認した。こうして、一連の「鰭（ひれ）をもち、身をくねらせる S 字状図像」を「龍」と見る理解が広まり、そのモデルになったのは、中国から伝わった銅鏡に表された龍の図像だったと考えられるようになる。

写真　池上曽根遺跡の「龍」（大阪府立弥生文化博物館）

一方、春成秀爾氏は、「後漢代の銅鏡の鏡の図像を原画として、弥生土器の龍が生まれたとする説の根拠は、後漢代と弥生時代は同時代であること、両者とも体をくねらせて四肢と尾をもつ想像上の動物であることの２点だけ」で、「相当の無理を重ねた一つの仮説にすぎない」と指摘する。春成氏によると、中国鏡の龍の図像は、頭・胴・尾、前肢、後肢のどの要素をとっても陸棲の肉食獣を表すのに対して、弥生土器の龍は、くねらせた胴・尾と、三角形の鰭状の突起が特徴的で、水棲の獣あるいは魚として描かれている。だから、弥生土器の S 字状図像を龍として見る場合には、鰭の位置、大きさ、長さと向きによって、下顎、２本の角、２つの耳と１つの鬣（たてがみ）、２本の前肢、２本の後肢などを判別しなければならない。

果たして、弥生土器の「鰭付き S 字状図像」は、本当に龍を表したものなのだろうか。竜蛇という表現がある。蛇は自然界に存在するが、竜（龍）はあくまでも空想上、超自然の存在だ。天理参考館が所蔵する殷代の甲骨文字を見ると、竜の字形は、胴部と尾を単線で表すが、手足はなく、頭に２本の角を持つ。有角の蛇は、すでに超自然の存在だ。中国の竜は、その後、独自に発達を遂げ、さまざまな生き物の部分部分がハイブリッドに組み合わさって究極化した姿が「龍」だと言える。後漢の王符による九似説によれば、角は鹿、耳は牛、頭は駝（駱駝）、目は兎、鱗は鯉、爪は鷹、掌は虎、腹は蜃（しん）（蛟）、項（うなじ）は蛇なのだ。龍は、『史記』の劉邦出生伝説をはじめ、中国では皇帝の象徴として扱われた。

これに対して、倭人社会の伝承を伝える『記紀』や『風土記』には、土地や水の精霊としての竜蛇の類を描いた神話や説話が認められる。記紀では、三輪山の神は、櫛笥（くしげ）に隠れる小さな蛇として描かれ（箸墓伝承）、雷鳴を轟かせ、稲光を走らせる大蛇としても描かれる（雄略記）。ヤマトタケルを苦しめた伊吹山の神も大蛇だった。記紀や風土記には、有足の蛇（仁徳記のミズチ）、有角の蛇（常陸国風土記のヤツノカミ）も登場する。ヤツノカミ（夜刀神）は、谷の池に棲み、胴体が蛇で、頭に角がつく。群れをなして現れ、見る人の家門を滅ぼし、子孫を絶やしてしまうと言われ、開墾作業を妨害したため、マタチ（麻多智）によって成敗された。

また、最近、奈良時代の疫病対策として話題になった二条大路木簡の呪符では、南山の下の流れない水の中に、九頭一尾の大蛇があり、あまり物を食べないが、「唐鬼」（天然痘）を食すと記される。その霊力に期待して、「朝に三千食え、暮に八百食え。急々如律令」とまじないを行った。記紀に見えるヤマタノオロチ（八岐大蛇・八俣遠呂智）は、八頭八尾の大蛇で、人身御供を要求した。このように、記紀や風土記等に見える竜蛇の類いは、オロチや大蛇と表記され、四肢を備えた「龍」ではない。つまり、古代中国の龍は、さまざまな生き物の要素が接合した「ハイブリッド」型だが、倭人社会の「竜蛇」の姿態は、有角あるいは有足以上のハイブリッド化が進まず、ヤマタノオロチにしても、二条大路木簡の九頭一尾の大蛇にしても、頭や尾など、身体の一部を同じ形でクローンのように過剰化させた特徴をもつ。このような異形の竜蛇（オロチ）は、強い霊力をもち、人々から怖れられる存在だった。

このように考えると、弥生土器の「鰭付き S 字状図像」は、胴部に付加される多数の鰭を過剰化した身体部分の表現と見ることもでき、中国のハイブリッド型の龍というよりは、倭人社会に根ざしたクローン増殖型の竜蛇（オロチ）の姿を表しているのかもしれない。池上曽根の竜蛇（オロチ）の右側には、木の枝を逆さにしたような図像が見られ、春成氏は雨を呼ぶ稲妻の表現と考える。また、弥生土器の竜蛇（オロチ）の多くは、長頸壺（水壺）に描かれ、井戸から出土する事例が目立つ。齋藤純氏によれば、雨や水害に関連する大蛇伝承は日本列島の各地に見られるが、弥生時代の竜蛇もやはり雨や水と深く結びついていたようだ。